

## 日本SOD研究会報

# 特集 雑誌に見る最近の医療、健康報道

## 市販薬にも副作用 元医大教授が明かす 抗がん剤治療は もう時代遅れ

発行元 日本SOD研究会 宮城  
住所 〒158-0094  
東京都世田谷区  
玉川1-15-2 B棟 2802  
TEL. 03-5787-3498  
協力：株式会社丹羽メディカル研究所  
<http://www.niwa-medical.com>

### ◆市販のかぜ薬で認知症

ここ数年、大手出版社が発行する週刊誌に「抗がん剤治療の是非」や「薬の副作用」に始まり、医療への不信、薬への不信、食品への不信などの特集記事が組まれることが多くなっています。なかには、食べてはいけない日常食品のリストを実名スクープした週刊新潮と、

本当に食べてはいけないのかと銘打って週刊新潮の記事に反論した週刊文春が数週間にわたって反論合戦を繰り広げて話題になりました。これらはすべて、高齢化の波にあって誰もが健康で長生きするための情報を求めている証と言えるのでしよう。

そんななか、気になった情報をいくつかピックアップしてみました。

ひとつは、週刊現代と週刊ポストが同時期に掲載した市販薬の記事です。週刊現代は「市販のかぜ薬で認知症になる」というタイトルで、市販のかぜ薬や胃腸薬、鼻炎薬などの抗コリン作用を持つ薬

が認知症の発症と関係していることが、イギリスの論文で発表されたと報じています。研究では抗うつ剤などで症状が出たということですが、かぜ薬や胃腸薬を始めとする市販薬にも抗コリン作用を持つものがあふれていることから、医師らもこれらの薬を安易に常用することの危険性を認識しておく必要があると記してありました。

片や週刊ポストは「知らずに飲んでいる市販薬、命にかかわる副作用」と題し、やはり同様のイギリスの論文より、市販薬による認知機能低下の副作用を記事にしています。加えて、誰もが知っている市販薬のかぜ薬で間質性肺炎の副作用や、胃腸薬で肝機能障害などの副作用があったという記事も載っています。普通、軽いかぜだから市販薬でも飲んでおこう、かぜ気味だから早めに市販薬、と思っ

て飲み続けて、それが肺炎になるなんて考えもしません。肺炎と、かぜは症状が非常に似ているので、つい市販薬で大丈夫と思ってしまう。ところが市販薬にも常用

すれば副作用やアレルギー症状が出るという恐ろしさ。かぜを治すために飲んだら肺炎になったなんて、シャレにならない。簡単に買える市販薬だからこそ気をつけたということなのです。

## 高齢者ほど起きやすい 薬の副作用

この週刊ポストは薬の副作用に関して、毎号、いろいろな視点から記事を掲載しているのが興味深いところ。猛暑の厳しかった

8月号では「その体調不良は猛暑ではなく薬のせいだ」と題し、真夏によく感じるだるさ、食欲不振、息切れ、めまいなどが、ひよっとしたら薬の副作用かもしれないというのです。例として、ある60代の会社員の方の話が書かれています。その方は初期の糖尿病だということ。普段から食事に気を使っている、なるべくよく歩くなどの運動もするようにしていたそうです。なのに朝起きてから頭がボーっとして身体が何となくだるいと感じ

ていました。それは猛暑のせいだと思っていたのですが、頻繁にめまいなどが起きるので病院に行ったそうです。そうしたら低血糖の初期症状だと診断されました。放っておいて重症化すると大脳機能が低下し、痙攣、錯乱、意識を失い昏睡状態になることもあるそうです。国立国際医療研究センター・糖尿病情報センターによると、このような低血糖症は糖尿病の薬の副作用として多く報告されている症状だといえます。

病院から処方される薬、市販されている薬には必ず注意事項が書かれています。それをきちんと読んで把握する人は少ないのではないのでしょうか。さらに副作用という言葉は、抗がん剤などで毛が抜ける、激しい吐き気や口内炎ができる、といった情報を何となく認知している程度。抗がん剤ならまだしも、一般に広く処方されている糖尿病や高血圧の薬の副作用が自分の身に降りかかるなんて考えもしないと思います。それもはっきりと薬のせいだと気づくことも

難しいでしょう。

記事の中で医師が言うのはまさにそこです。健康で若い人ならすぐに副作用も起きにくいかもしれませんが、問題は高齢者だと言えます。それも多剤併用（一度に何種類もの薬を処方され飲んでいく）。厚生労働省によると、65歳以上の高齢者で一度に3種類以上の薬を飲んでいる人の割合は実に56・6%にも及ぶそうです。医師も、薬を体内で代謝して排出する肝臓や腎臓の機能は、歳と共に低下する、つまり高齢者ほど薬に対する副作用が出やすくなると言っています。

1日に飲む薬の種類が増えれば増えるほどそのリスクは高いのに、高齢になればなるほど種類の薬を飲む傾向があるとか。

とくに高血圧、糖尿病の薬を服用している人は、夏バテの症状だと言われる、だるさや吐き気、めまい、息切れ、食欲不振といった症状が続くようなら信頼できる医師に相談したほうがいいのかもありません。

## 薬やめる科

薬に関する記事の最後は、女性自身の「あなたの飲んでいるのはムダな薬が9割です」と題して、日本で初めてという「薬やめる科」を自身のクリニックで開設した松田医師が提言する記事です。すべての薬には人体にとって毒であるという側面があることを見過ごしているという松田医師。最近薬が原因の体調不良が多いと言います。とくに問題なのは長期にわたって薬を飲み続けること。血圧、コレステロール、中性脂肪などに処方されている9割は必要ないものだと。もしもそれらの薬を常用していたら、まず自分の薬がどんな副作用をもたらすのかを調べ、その不安や主張を受け止めてくれる医者を探すことが必要だと教えてくれています。

## 元医大教授が がん標準治療に異議

医療に関する最近の週刊誌の記



事で、いちばん興味深かったのは、サンデー毎日です。5月から数か月の連載で、元京大医学部教授が標準がん治療（手術、抗がん剤、放射線を中心にした治療法のこと）に異議を唱えた、という記事でした。一回目の冒頭リード文には

「東京大医学部と東西の双壁をな

す京都大医学部の元教授が、あることが標準がん治療に公然と異議を唱えた。がん治療の新たな方向性を模索している和田洋巳医師（75歳）が提言する集中連載。医学界に衝撃を与える前代未聞の告白録である」

多少大げさではありますが、日

本のトップの元医大教授が、がん標準治療に異議というのは画期的なことかもしれません。

和田先生は京大時代、呼吸器外科の医師として数多くの肺がん手術を執刀してきました。2007年に教授を退官し、自身のクリニック、からすま和田クリニックを開設して現在に至っています。普通、京大や東大の医学部教授にまでなる先生は、全国の病院から院長候補に

引っ張りだこだという話を聞いたことがあります。事実、和田先生のもとにもそのような話はいくつもあったそうです。しかも高額な年収を約束されたのです。それなのにリスクキーな自身のクリニックを開いたには理由がありました。

それは、これまで2000例を超える肺がん手術を行ってきた先生

が、どんなに完璧という手術をしたとしても、その4割の患者が再発したという事実でした。また術後に抗がん剤を投与しなくても再発しない患者さんがいる一方で、抗がん剤を投与しても再発する患者さんがいる。それらの疑念を抱えながら目の前の手術に明け暮れたそうです。

なかでも肺がんの再発はステージ4の治らないがんとみなされてきました。それでも標準治療を行い、ほとんどの患者さんが過酷な抗がん剤治療をしていたことに対し、先生は実に率直に「その点については大きな疑問や矛盾、脱力感を感じていました。抗がん剤には毒性があることはわ

かっけていても、他に手立てがなく、抗がん剤治療を行っていました。患者さんはつらい副作用に苦しみ、そして使える抗がん剤が尽きれば死を待つのみ。中には、抗がん剤の毒性死したときか思えない患者さんもいました」と話されています。

### 末期がん標準治療せず 食生活改善で5年以上延命

そんななか、先生が定年退官間

近のことでした。5年以上前にサジを投げ、とつくに亡くなっていくはずだと思っていた患者さんがひよっこり現れたのです。どんなことをして生きているのか聞いたところ、食事を厳格に変えたと。その時、民間療法には怪しいものも少なくないとは思っていたけれど、その例を一蹴してはいけなかったと思ったそうです。

「多くの医師は、標準治療で6割しか治せていない（ステージ4以降は治せていない）にも関わらず、患者さんのこの手の話には耳を貸

そうとすらしません。真面目に取り合えば周りからうさん臭く思われ、仮に民間療法の一部に標準治療を超える効果があると分かれば、自分たちがやってきた治療体系の否定や崩壊にもつながりかねない。だからみんな「見なかった、聞かなかった」「こじこする」

この和田先生のお話は、丹羽先生がよく話されていることとびつたり符号します。丹羽先生の患者さんが、検査のために従来の病院に行くと、抗がん剤治療をしていないのにがんが大きくなっていない、または縮小している、といった効果が出て驚かれたという話。

余命3か月と言われた末期がんの患者さんが丹羽療法で2年後に病院に検査に行ったら、亡霊に会ったかのように驚かれ、まれに自然に延命できる人もいるんですよ、と訳の分からない言い訳をされたという話。それらの中で、真剣に丹羽療法のことを聞いてきた熱心な医師はほとんどいなかったといえます。今回の和田先生のお話を読んで納得することしきりでした。

「見なかった」ことにできなかった和田先生は、食に関する長期生存を裏付ける科学的な根拠はないかと海外の研究論文を探り、野菜などで体内環境

phが高く、がんが最も好む酸性環境を作ってしまうというわけです。そこで先生は退官後、新しく開設したクリニックで食事の徹底した指導を始めました。開設から10年。先生が推奨する食事は『がんに負けないからだをつくる和田屋のごはん』(写真)などのレシピ集までできる人気になりました。

これもまた、がん患者さんに肉乳製品はダメ、野菜や魚、豆、キノコ類の食事を中心にするよう指導している丹羽療法と全く合致します。丹羽療法の場合は、これに先生が何十年にも渡って研究開発してきた独自の生薬を使った制癌剤処方があり、その力が寛解率(治ったわけではないが一時的に良くなった割合)の向上に大きく影響しています。

和田先生のクリニックは開設以来、主に食生活の改善によってがん患者さんたちの延命効果を上げているそうです。それぞれのがんの勢いを表す腫瘍マーカー、炎症の度合いを表す白血球中の好中球の割合、免疫力を見るリンパ

球の割合、そして体内環境の酸性度を見る尿のph値などを調べ、そのうえで患者さんに合った治療メニュー、つまりがんの発生と暴走の根本原因である食生活の改善メニューを示すのです。

基本は患者さんたちがこれまで診てもらっていた病院で診てもらいながら和田先生のクリニックにも通うという方法。しかし従来の病院で、抗がん剤治療を否定している和田先生の話をする、拒絶反応を示す医師が多いそうです。抗がん剤治療を受けないならうちではもう診ないとか、ひどいものになると和田クリニックにだけは行くなどという医師もいるそうです。丹羽先生もまったく同様の妨害を受けてきました。さすがに最近丹羽先生も心得たもので、患者さんには「従来の病院で手術だけしてもらって、検査だけしてもらっていらっしやい。私のことは言わなくていいから。そのあと抗がん剤治療を勧められたら、後で考えますと言っ



『がんに負けないからだをつくる  
和田屋のごはん』  
和田洋巳監修著 長谷川充子、櫻幸著  
WIKOM 研究所発行

と言うのだとか。

そんな和田先生の食事療法でどのくらいの患者さんが寛解しているのでしょうか。

「普通の大病院でステージ4に標準治療をした場合、たいてい延命を名目とした抗がん剤治療に苦しんだ末、治療開始から1、2年で亡くなるのが実情です。しかしうちの場合は、ステージ4でも2、3割の人は5年以上普通の健康な人と変わらない生活を送っています」と正直に話してくれています。

## 抗がん剤治療はもはや時代遅れだ

抗がん剤治療はもはや時代遅れです。抗がん剤でがんを叩くという考え方は実に100年以上前から変わっていない、と指摘する和田先生。それでも標準治療をやめようとする医師たち。標準治療というガイドラインが医師たちの責任逃れのマニュアルになっていると言います。

「多くの医者たちは抗がん剤治療を

躊躇する患者さんに対して、昔と違って今は良く効く抗がん剤がありますから」となだめたり、治療を受けないとすぐに死んでしましますよ」と脅したりした挙句、最終的に治療の手立てがなくなると、もううちでできることはありません。ホスピスケアを受けてください」と宣言して患者さんを放り出す」

そうではなく、医師たちは自分のやっている治療は本当に正しいのかについて、いったん立ち止まって振り返り、間違いに真摯に向き合うことが大事だともいっています。さらに、劇的寛解例（代替医療などの治療のなかで本当に元気に延命している人がいること）に對し謙虚な姿勢で理由を調べるべきだと。

まだまだ紹介したい内容はたくさんあるのですが、興味を持たれた方はぜひ和田先生の著書などをご覧ください。

※抗コリン作用：副交感神経を亢進させるアセチルコリンの作用を抑えることで、消化管の運動亢進に伴う痛みや痙攣、下痢などを抑える作用

## SOD愛飲者インタビュー

関節リウマチにSODを1日9包

# 2か月でひじひざの痛みが和らぎ減薬にも成功

函館市 高田 美恵子(仮名)さん(75歳)

ガーデニングが趣味で、自宅の庭で毎日のようにお花の手入れをするという函館にお住いの美恵子さん。ところが15年ほど前の還暦を迎えた頃、いつものように庭でスコップを手にしゃがみこんだところ、足首あたりにしびれるような痛みが走ったのです。季節は冬を迎える晩秋の頃でしたから、最初は、

「朝晩急に冷え込むようになったから、関節がこわばったのかな」と思っていたのだそうですが、スコップで土を掘り起こす作業をしても手首がしびれて力が入らない。

そんな状態が続くようになり、病院に行ったところ、

「最初は関節リウマチだということ

で何種類かのお薬をいただいたんです。ところがお薬を飲んでもそんなに良くはならない。とうとうかどんどん痛くなってきて、おまけに口や目が妙に乾燥してきて、これは薬の副作用じゃないかって



思ったんですよ。それで先生に相談したら、いろんな検査を受けて分かったのがシェーグレン症候群という病気だったんです」

シェーグレン症候群とは国から難病指定されていて、難病情報センターによると、おもに中年女性に発症することが多い自己免疫疾患だとか。膠原病（関節リウマチや全身性エリテマトーデス、混合性結合組織病など）に合併する二次性のものと、原発性のものがあるそうです。目や口の乾燥は合併症的な症状らしく、美恵子さんの場合も、関節リウマチから発症したのではないかと。治癒することとは不可能で、薬で症状を軽減することしかできないそうです。

そんなことを説明され、気持ちがどんどん落ち込む日々。なにより、ひじやひざが痛くてガーデニング作業ができなくなったことがつらかったといえます。

「リウマチに加えてシェーグレンですからまた薬が増えました。口の渇きや目の渇きに対しては飲まないわけにはいかない。リウマチ

も痛みがひどくて薬に頼らざるを得ないわけで、こんなに薬ばかり飲んででは良くないんじゃないかと思っていました。ちょうど薬の副作用がどうのこうのといわれ始めた時でしたから、できれば薬は飲みたくなないと」

そんなときに札幌に住んでいたお嬢さんから、

「娘はいろんな健康食品などの情報が集まる職場にいて、これいいんじゃない？」と行ってSODの資料をいっぱい送ってきてくれたんで



す。普段から簡単になんでもかんでも勤めるような子じゃないのに、このときだけは、これはいいはずだというんです。それで資料を読んでみたら、免疫に関することがいろいろ書いてあって、普通の病院では治らないと言われていた膠原病なども良くなっている人がいる話など参考になりましたね。だから、これはほんとにいいかもしれないと」

そうして飲み始めたSOD。資料の中に、最初は多めに飲んだほうがいいと書いてあったので、一日に9g入りを3包飲んだそうです。通常3g入りなので9g入りを3包は、通常の9包分にあたります。これはSODを開発した丹羽先生も納得の分量でしょう。その成果は2か月で現れました。

「飲み始めて2か月くらいでしょうか、なんか昨日より今日、今日より明日という感じで痛みが少しずつ減ってきました。リウマチの薬はSODを飲み始めてからは減らしていました。だから、薬は関

係ないんです。なのに、ひじやひざがラクになっていたんです。すごく嬉しかったです。以来ずっと飲み続けています」

いまのところお薬はシェーグレン症候群の症状に対し、唾液を出す薬とリウマチの軽い薬だけだそうです。

「リウマチの指数はものすごく低くなって、先生も驚いています。言ってもわかってもらえないと思うんでSODのことは内緒です」

## 何は無くともSOD 15歳の犬も愛飲で元気

薬の処方があるので月に一度は病院に通う美恵子さんですが、待合室で待っていると、

「病院で待っている間って長いでしょう？ だから周囲の人と話をするじゃないですか。そうすると、リウマチが発症して2年、3年という人が、歩くのもしんどそうにしながら、おたくはまだ発症したばかりなんですかって聞いてくるんです。私が痛そうにしていな

「から、そう見えるんですね。だから、いえいえもう10年以上のベテランですよという、みんなびっくりしますね。なんでそんな元気でいられるのかって。うちのほうは北海道ですから冬はものすごく寒いんです。そんなときもちよつとは痛みは出ますが、湿布薬を張ればラクになって、本当にありがたいです。近所の人からも、病気をふたつも持っているなんて信じられないくらい元気だといわれるんです。自分をつくづくラッキーだったなと思います」

すっかりSOD愛飲者となった美恵子さん。以前は旅行に行きたくても、いつ何が起るか心配で



どこにも出かけていませんでした。

「でも、今は大丈夫。どこに行くのもSODは忘れません。他の何を忘れても、これだけは絶対に持参します。私にとってお守りみたいなものですね。ほかのサプリは一切飲んでいません。信じられるのはSODだけです。私の体がその証明ですから。うちは犬もSODを飲んでいますよ。もう15歳ですが元気です。さすがにトシですから食欲のないときもありますが、そんなときもSODだけはちゃんと食べてくれます。やっぱり犬たちは分かるんですよ。毒草などもすみ分けられるっていうから、身体に必要なものは分かっているんですよ。いいものは分かっているんです」

ワンちゃんも愛飲者とは嬉しい話です。欲を言えばシェーグレン症候群にも効いてほしいという美恵子さん。一度、機会があれば丹羽先生の診療を受けてみてはいかがでしょうか。丹羽先生は膠原病の研究をされていますから。

## SOD様作用食品 体験者の声をお聞かせ下さい。

難病で苦しむ方たちが、少しでも早く良い治療法に行き当たるように、本誌では愛飲者の声を募集しています。お手数ですが、

〒158-0094 東京都 世田谷区  
玉川1-15-2 B棟2802

日本SOD研究会 宮城宛

TEL 03-5787-3498

までご一報下さい。



◆丹羽先生診察ご希望の方は

御紹介、御予約いたします。

※自由診療となります。

丹羽メディカル研究所

☎ 0120(731)175

もしくは

日本SOD研究会

☎ 03(5787)3498

まで お電話ください。

●SOD様作用食品とは●  
**丹羽博士の開発**

SODとは、スーパーオキシド・デイスムターゼの頭文字をとったもので「活性酸素」を取り除く「酵素」のことです。

最近、健康の力ぎを握る物質として「活性酸素」と「SOD」の働きと役割がクローズアップされてきました。そして、活性酸素が体内に増加すると、がんや生活習慣病など、さまざまな疾病を引き起こすことが明らかになってきました。

体内に活性酸素が増えても、本来、人間や動物には余分な活性酸素を取り除くSODという酵素が存在していて、病気を防ぎ、身体の健康を守ってくれます。ところが、現代社会の弊害（公害、薬害、食品添加物の害）などが、活性酸素を暴走させていて、体内のSODだけでは追いつかなくなっています。

しかし、残念なことにSODという酵素は分子量が大きいために内服しても胃で破壊され、腸から吸収されませんでした。それを、内服できるように研究されたのが丹羽SOD様作用食品です。

開発した丹羽朝負（耕三）医学博士は、京都大学医学部を卒業し、医学博士として数々の研究が注目を集めていたときにご子息を白血病で亡くされ、それをキッカケにSODの研究を始めました。副作用がまったくないがん治療薬、がテーマでした。開発には実に



二十年もの歳月が必要でした。

「活性酸素をはじめとする免疫学の研究を通して私が知った、自然の摂理は、私に大自然のメカニズムの精緻さと人間の自己治癒力の偉大さを教えてくれました。病気は自分が治すもの。私は、この理想を患者さんの誰もが実現できるように医師の立場から最大限の努力を続けています。」

先生は今も、土佐清水病院院長として、毎日、医療の現場でがん、アトピー、膠原病などの難病に苦しむ患者さん達の治療にあたっています。また、SODなどを始めとする論文は海外でも高い評価を得、日本のみならず海外の学会で講演をしたり、大学病院で特別講演をしたりと、多忙な日々を送っています。

幸いなことに最近、西洋医療と東洋医療などを統合した医療へと世の中の流れが向かっています。代替医療に対する関心や認識も高まり、丹羽博士が40年も前から言っていた、本当の意味での人を診る診療の時代です。

この会報は、そんな丹羽博士の志を受け、誰もが自分の力で健康でいられるように、難病で苦しむ方が少しでもなくなるようにとの願いを込めたものです。

## SOD研究会からのお知らせ

いつもSOD研究会報をご覧いただきありがとうございます。

最近、特に当研究会へお問い合わせいただくことが多い内容についてお知らせ致します。

「丹羽耕三博士のSOD様食品は金の笠のシールが貼られていれば、どこも同じものなのではないか？」というような、ご質問をよくいただきます。

その回答としましては、金の笠（管理番号付）シールは丹羽免疫研究所で分析・検定し、エーパック・ニワ加工工場（土佐清水市）で開発当初から、厳しい品質管理のもとに伝統的な製法で造られる製品だけに貼付される信頼の証（マーク）でした。しかし、ここ数年前より丹羽先生の考えで別の工場で製造されたSOD様食品にも金の笠のシールが貼られ、販売されているものもあります。土佐清水市の工場で製造されたか、そうでないかを見比べる一つの目安が、まず金の笠シールの特徴にあります。

### エーパック・ニワ加工工場（土佐清水市）で製造されている製品シールの特徴



原寸大 横 30mm、縦 25mm

- 管理番号は6桁  
※土佐清水で製造された証明の通し番号となっています。
- シール左部分に絵や記号が記載されている  
※左部分の表示は製品管理の為、不定期に変わります。
- 他の工場で製造された製品と比べ、原末の味や色、粒の大きさが違う場合などがある